

〈次回予定〉

二〇一七年三月十八日(土)

午前十一時より 紫友会館二階会議室

春の季の句を三句作ってお出でください

お待ち申し上げます

萩こぼる朝風谷中宗琳寺

土菓

主病むや野分の庭の荒れしまま

薊

鼻欠けの羅漢の鼻に蜻蛉かな

曙

山霧や鳥居佇むあたりまで

土菓

紫友さろん第五十三回句会

二〇一六年十二月十七日(日)

木枯らしの吹くに任せん古幟

曙

秩父路の地蔵の涙夕時雨

曙

気の澄むや塵も芥も雪景色

土菓

離婚をと病む妹と日向ぼこ

九轉

年忘れ締め雑炊酔い心地

照太

青空を木守り柚子の占めており

潮音

紫友さろん第五十二回句会

二〇一六年九月十八日(日)

秋茄子の煮浸し一つ猪口一つ

照太

紫友さろん第五十一回句会

二〇一六年六月十八日(土)

石ころを蹴って家路や梅雨晴れ間

土菓

(シルクロードにて)  
夏空や羊草食むいくさ道

薊

恵比寿顔竹の子めしを頬ばりて

山登

泳ぐ子や共に競ひし友のあり

照太

荒れ城址夏草未だ戦へり

曙

紫陽花の何故か悲しき崖の上

潮音

関東の雲の浮気や旱梅雨

土菓

紫友さろん第五十回句会

二〇一六年三月十九日(土)

京の膳わずかに苦き土筆かな

土果

春雨や床屋の親父座りをる

土果

春の風襟立てつつ胸はずむ

照太

桜餅懐メロ薫る外は雨

山登

朝散歩傘に透けたる春の雨

山登

紫友さろん第四十九回句会

二〇一五年十二月十九日(土)

人寄れば炎に化ける落葉かな

土菓

コルク栓リースに飾るクリスマス

薊

年忘れ毎日続く物忘れ

照太

線香に一つまた一つ枯葉落つ

潮音

木枯しや薄暮の街の迷ひ犬

土菓

紫友さろん第四十八回句会

二〇一五年九月十二日(土)

行く友の背の縮みけり秋の暮

山登

秋桜野仏囲み囁けり

曙

冬瓜の姿たのもし味淡し

薊

新涼や船の汽笛も透き通り

三郎

俣ならぬことの多くて秋の空

土菓

秋祭り刺し子半纏千々に舞い

曙

紫友さろん第四十七回句会

二〇一五年六月二十日(土)

むらさきのひともと揺れて朝の風

土果

土砂降りの過ぎて遠雷かすかなり

潮音

蝸牛動かぬはずはなかるうに

土果

わら焼いて酒は桂月初がつを

あざみ

ズズルリ素麺のみの孤食かな

曙

紫友さろん第四十六回句会

二〇一五年三月二十一日(土)

猫の眼の動き誘いて桜散る

曙子

春陽や嘆き羅漢の頬緩む

曙子

沈丁や思索顔なる石仏

山登

誠こそ相応しからむ烈公梅

山登

ゆうべより少し明かるき朧かな

土果

紫友さろん第四十五回句会

二〇一四年十二月二十日(土)

いっせいに銀杏散る空光満つ

三郎

氷雨ふる小鳥もとばず氷雨ふる

桃芳

寒鯉の黙のひそめる池暗し

三郎

教会の門扉はかたし神無月

三郎

宵越しの片意地融ける日向ぼこ

土菓

椿落つ音のありたる廃墟かな

曙

虎落笛過疎の村落震わせて

曙

紫友さろん第四十四回句会

二〇一四年九月十四日(日)

朝顔の昨日三つ四つ今日二つ

山登

追ひ上ぐる一艇身や雲の峰

三郎

踏切りの手前に暑さ残りをり

土果

新涼や猫は居場所を替え始む

桃芳

名月の少し歪みて憂き世かな

曙

紫友さろん第四十三回句会

二〇一四年六月二十一日(土)

何くそと両手で傘を持ちにけり

山登

紫陽花の咲き誇る道枯るる道

山登

青あらし木々それぞれのいのちかな

市原

紫友さろん第四十二回句会

二〇一四年三月十五日(土)

粛々と春が通るや城下町

曙

露のとう思い思いに居を定む

曙

屋根わたるとひの忙せわしや残る雪

九轉

何やあるしばたき仰ぐ春の空

山登

紫友さろん第四十一回句会

二〇一三年十二月二十一日(土)

空つ風破れ障子の笑ひけり

土菓

子を抱き背に凧を負う身かな

土菓

重ね着の数増す老いのきざしかな

曙

冬木立凜然として鹿島宮

曙

鶴島に甲羅干したり冬日向

山登

短日の原爆ドーム鷺一羽

山登

風変わりしろがねの波枯尾花

曙

二人してれんこんコロッケ小春かな 山登

へその緒の絆のありて去年今年 九轉

凧や日向の木々も立ちつくす 市原

へし合つて華やぐ子等やシクラメン 土菓

紫友さろん第四十回句会

二〇一三年九月十四日(土)

つくづくと蟬の経文夏は去ぬ 潮音

夜明け前夢に聞こえし虫の声 市原

爽やかと言はむ一日つが恙なく 二郎

蝸ひびや床几しに酒をはこばせて 土菓

遠来の友明日帰る菊の酒 山登

秋桜の香りや少し湿りたる 土菓

露坐佛は泰然自若地虫の夜 三郎

冷風にたんすの中をかきまわし 桃芳

昨日はき又今朝はいて落ち葉かな 桃芳

零るほどの風の流れや萩の寺 土果

紫友さろん第三十九回句会

二〇一三年六月十五日(土)

蝸牛妻子残してどこへゆく 九轉

神妙な吾子の受洗や柿若葉 三郎

枇杷二つ半年延びたる命なり 山登

岩清水喉に聞こえし山の声 市原

喜雨待つや湖底の輝ひびに青きもの 土果

夕顔の咲くや葎ししの内と外 土果

父の日や子と酌みかはす齡なる 三郎

梅雨の朝雨音の他無かりけり 市原

紫友さろん第三十八回句会

二〇一三年三月十六日(土)

競漕の一挺身に風光る 三郎

据膳を前に春眠破れたり 土果

紫友さろん第三十七回句会

二〇一二年十二月十五日(土)

熊打ちの一音残し山暮るる 三郎

わが供花は一輪で足る野水仙 三郎

遭難碑に日の温みあり山眠る 三郎

〈頂いたお葉書から〉

いつもご案内をご送付いただき感謝して居ます。土曜日はあいにく都合がつかず失礼してきます。

去る九月に、西安と敦煌へ旅しました。一、二と十一、十二は西安で、三、十は敦煌です。皆様によりしく御伝声下さい。

一 秋気澄む孔雀をせつつくアヒルかな

二 歩調とる黄色の僧衣塔の秋

三 大西日沙悟浄いづこ月牙泉

四 残暑酷ラクダに揺るる鳴沙山

五 夏の果て玉門関のひつじ草

六 ゴビの原秋の逃げ水見つつ行く

- 七 木洩れ日や大房垂るる青葡萄  
 八 陽関や家なし道なし天高し  
 九 悪い人に仏盗られし秋の窟  
 十 お足元にお気をつけ下さい法師蟬  
 十一 亭々と常磐木聳ゆ碑林秋  
 十二 二千年待機の兵馬秋氣満つ

紫友さろん第三十六回句会

二〇一二年九月十五日(土)

秋祭り山車引く子らのしたり顔 市原

秋茄子に思ひをよせたり白磁皿 曙

日ぐらしや沈む夕日に鳴き急ぐ 市原

茜さす雲高くあり秋暑し 山登

天高く絵馬の馬にも精氣満つ 曙

入賞の友の渴筆<sup>かつびつ</sup>涼しかり 三郎

老いていま友語り初む原爆忌 三郎

紫友さろん第三十五回句会

二〇一二年六月十六日(土)

余生にもけじめはあらむ更衣 三郎

父母の忌のいとこはとこや夏座敷 三郎

古寺の老いたる木々や若もみじ 山登

紫友さろん第三十四回句会

二〇一二年三月三日(土)

頬染めて膝崩しけり桃の花 土果

うす紅にそまって梢春近し 桃芳

春眠や夢の通ひ路閉じぬまま 土果

風光る語らひはずむ散歩路 市原

竹刀取る梅の古木の構え哉 九轉

紫友さろん第三十三回句会

二〇一一年十二月三日(土)

母逝けり鶺<sup>ひたき</sup> 日毎に窓に寄る 九轉

スクラムの雄叫び透る寒の入 三郎

今年米ははの里から亡き母へ 九轉

懷手とかずに聴けり子の主張

三郎

春近し思わぬ方に飛行船

三郎

紫友さろん第三十二回句会

二〇一一年九月十七日(土)

梅の影一寸ばかり縮みけり

山登

いつ来るか娘嫁ぐ日雛納め

市原

操帆をみなの女の下知や秋日濃く

三郎

二月尽く小寺の雨に濡れながら

土果

秋風に猫は寢床をかえはじめ

桃芳

春めけば湯島天神おんな坂

土果

孫たちも祖母を看取れり星流る

九轉

寒灸や百会に残る火の匂ひ

三郎

里山にいのちみちたり百千鳥

九轉

紫友さろん第三十一回句会

二〇一一年六月四日(土)

先達を見送りし夜や春の雪

山登

孫たちの婚の宴や百千鳥

九轉

線香のの字涼しや閻魔堂

土果

紫友さろん第二十九回句会

二〇一〇年十二月四日(土)

小春日の家陰避けゆくまち歩き

山登

菖蒲湯や児らの燥ぎし日の遠く

三郎

蒼ざめて咳する街の灯かな

土果

紫友さろん第三十回句会

二〇一一年三月五日(土)

冬の星律気にともる団地の灯ひ

山登

立冬や陶土搗く杵夜もすがら

三郎

歳の瀬を鴉の低く掠めけり

土果

紫友さろん第二十八回句会

二〇一〇年九月四日(土)

对岸の声よく透る秋日和

三郎

稲の香に浸る農夫の皺深し

三郎

天の川ぼくらはなんどデートかな

九轉

七輪の出番来れり初秋刀魚

三郎

道場の畳に残る暑さかな

土果

紫友さろん第二十七回句会

二〇一〇年六月五日(土)

大の字や開けつびろげの五月晴

土果

兄弟子の胸借る土俵声涼し

三郎

松籟に身の洗はるる立夏かな

三郎

紫友さろん第二十六回句会

二〇一〇年三月六日(土)

春雷をまぢかに聞けり古戦場

三郎

登校の列乱る坂春の雪

九轉

誰が筆や雛を覆ひし古手紙

土果

紫友さろん第二十五回句会

二〇〇九年十二月五日(土)

海橋の締むる一湾初景色

三郎

七五三きりりつしやんとばばいたり

九轉

面影の忘れ難きを雪が降る

土果

紫友さろん第二十四回句会

二〇〇九年九月五日(土)

老の坂追い来る風の秋めきて

土果

風雨止む網戸すかして虫の闇

九轉

昭和史を読む天窓や晩夏光

三郎



紫友さろん第二十三回句会

二〇〇九年六月六日(土)

枇杷の実の青きは青く匂ひけり

土果

ザツと来て上がれば元の照り返し

桃芳

群雲を捕ろうとかざす虫捕網

願達

紫友さろん第二十二回句会

二〇〇九年三月七日(土)

スクラムの踏張る大地草萌ゆる

三郎

満潮やのっそり出づる春の月

三郎

この枝のこの芽の春や風渡る

土果

すくろの末黒野の光とけあふ遊水池

三郎

まんさくのやさしき風を待ちにけり

土果

花車ひよどりがいて舞い落ちる

桃芳

あでやかなひがん桜にめじろくる

桃芳

触わりたし我慢で見上げ内裏雛

曙子

白梅に湯の香混じりし鄙の宿

曙子

紫友さろん第二十一回句会

二〇〇八年十二月六日(土)

孫帰国ポインセチアの玄関に

九轉

小雀の群れて華やぐ冬木立

土果

野良猫も寄り来る朝や霜の立つ

土果

着ぶくれて老いを諾う影法師

三郎

心得し鴉の残す木守柿

三郎

雲低く黒き峰々神無月

悟茶

冬蝶思わず送る応援歌

曙子

人恋し人ごみわたる年の市

九轉

紫友さろん第二十回句会

二〇〇八年九月六日(土)

余生なほ試練あるべし稲びかり

三郎

出でて座す本蔵に似て秋蛙

小野寺

海難の船笛長し春の雪

三郎

この街も人恋しげに秋時雨

土果

秋の蝶一息入れる畑仕事

九轉

紫友さろん第十七回句会  
二〇〇七年十二月一日(土)

白粉おしろい花やばばにくれたる髪飾り

九轉

巨木立つ僧もくもくと落葉掃き

九轉

紫友さろん第十九回句会

二〇〇八年六月七日(土)

一湾に船影あらず初御空

三郎

殉難いしづみの碑 洗う走り梅雨

三郎

母の味忘れて久し雑煮椀

三郎

旅半ば麦秋に目の眩みゐて

三郎

紫友さろん第十六回句会

二〇〇七年九月一日(土)

巡礼の白際立ちて若楓

曙子

こうろぎの鳴くや残暑のすき間から

桃芳

紫友さろん第十八回句会

二〇〇八年三月一日(土)

自分史の序文おこせり秋立つ日

九轉

露味噌のかすかに苦き一人膳

遊心

残り蚊のひと刺しあつて日の暮るる

土果

春泥やふるさとの道下駄の道

土果

紫友さろん第十五回句会

二〇〇七年六月二日(土)

木蓮のみな天を指す花芽かな

土果

風鈴の音聞え来て街ゆかし

早坂

名護屋城虹のかなたに何を見き

九轉

老犬の歩み緩めし残暑かな

曙子

紫友さろん第十四回句会

二〇〇七年三月三日(土)

行く水や春陽のはねる音もなく

土果

父の日や午睡を誘ふ遠郭公

三郎

ジョギングの足の軽さに春はそこ

九轉

遠雷や抜き手の少女きらめきて

三郎

風ありて幾万の芽の吹きしかな

土果

ひとのみに太陽食らう雲の峰

潮音

日矢こぼす如月の雲ノーサイド

三郎

紫友さろん第十三回句会

二〇〇六年十二月二日(土)

湯豆腐の白なめらかにひとり酒

遊心

歩みより流れを早む春の川

三郎

畳替えまず大の字になってみて

土果

しじゅうからけやきの梢あからみて

桃芳

落葉踏む音のかそけし女坂

三郎

紫友さろん第十二回句会

二〇〇六年九月二日(土)

や旅愁かきたつ一の膳

三郎

老いてなほ本音を吐かず冬帽子

三郎

や旅愁かきたつ一の膳

三郎

まどろみの熟寝となりし去年今年

三郎

団欒や骨刺す風は窓の外

土果

木洩れ日を吹き蹴散らすや空つ風

潮音

舟揚げる湖畔に立てり冬日射す

潮音

紫友さろん第八回句会

二〇〇五年九月三日(土)

離陸機の黒点となる天高し

三郎

二つ目の咄笑へず秋扇

三郎

野の花の枯るるは枯れてありにけり

土果

新暦と旧暦の差の暑さかな

桃芳

今朝いくつ咲いた朝顔空高し

桃芳

虫の声家まで続く帰り路

潮音

紫友さろん第七回句会

二〇〇五年六月四日(土)

昼寄席の嘶しんみり梅雨きざす

三郎

ひんやりと涼風よぎる街木立

光平

子つばめの五つ並んだ赤き口

桃芳

草笛や疎開せし日の遙かなる

三郎

七七忌切れぬ縁を桐の花

土果

紫友さろん第六回句会

二〇〇五年三月五日(土)

そと小雪ケースの中は華やぎて

桃芳

吹き過ぎた春一番のあと寒さ

桃芳

ふつくらと紅の膨らむ梅の枝

文子

騒がしく小鳥さえずり春の朝

光平

人の顔満開にする梅の花

光平

紫友さろん第五回句会

二〇〇四年十二月四日(土)

記録紛失

紫友さろん第四回句会

二〇〇四年九月四日(土)

いつときは樹々静まれり秋時雨

土果

鈴虫の音にさそわれる寒さかな

文子

秋の風心静かにしみて来る

光平

築十年隙間風吹く居間の中

文子

虫の音を追いかけてくる秋の風

文子

強い風激しい雨にすくむ秋

光平

アシカの子秋刀魚グルメでふくよかに

潮音

亡き兄を偲びて歌う秋風の詩

潮音

紫友さろん第三回句会

二〇〇四年六月五日(土)

夕風の海の彼方の白帆かな

閑居

喝采の一振り空し西瓜割り

三郎

合宿の雄叫びやまず晩夏光

三郎

風微か毛虫ぶうらり糸の先

土果

紫友さろん第二回句会

二〇〇四年三月六日(土)

春浅き鷺は水辺の忍び足

克

世の中は冷たい風吹く弥生かな

文子

冬の句囀に司祭つまづく野外ミサ

三郎

通勤路変えて見に行く紅の花

文子

合格の知らせうれしく独酌す

潮音

梅林のほどよき頃の初音かな

克

巨船押す小さき曳船山笑ふ

三郎

紫友さろん第一回句会

二〇〇三年十二月六日(土)

好々爺にまだなり切れず冬鏡

三郎

展帆を眩しむ埠頭冬うらら

三郎

電飾の哀しからずや人の群れ

克

寒椿受験の日には見たくない

文子

積もる雪跳ねても見えぬ犬の足

文子

鏡餅今年の火星を橙に

文子